opusdei.org

属人区長の書簡 (2012年4月)

聖週間にあたり、属人区長は、聖体の制定について考察する。4月23日の聖ホセマリア初聖体100周年記念は、毎日さらなる信心を込めてこの秘跡をいただくように促す機会となる。

2012/04/06

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

聖ホセマリアが次のように指摘しています。「キリストのご死去を黙していると、日常の勤めをまじめ真剣を自分の告白する信仰を真剣を加えるようになるはずです。したって知りにある生活の流れに付けると考えてはなりません。聖週間とは神の愛を深く極め、

 かな考えを捨てて、中心になるも の、本当に大切なものに向かいは天切なものいは天切なものいは天国に入れるのないは不動に入れななす。 それば何をしても無駄に過ぎればなりませい。 すれず。天国に入るらればなりませい。 ります。たまであるためにはないである。 を書せの邪魔をする障碍しないのです。 して、始えいのです。 して、はないのです。 してはないのです。 してはないのです。

イエスは、聖なる三日間をエルサレムの高間における使徒たちとの集いでお始めになりました。Desiderio desideravi hoc Pascha manducare vobiscum, antequam patiar [iv] 「苦しみを受ける前に、あなた方と共にこの過越しの食事をしたいと、私は切に願っていた」。聖ルカは、主の最後の晩餐のことをこう語り始めています。その一語一語に、人々に対するキリストの聖心の無限の愛が垣間見られます。主は、ついに〈ご自

分の時〉、久しく待ち望んでいた、 人類救済の時が来たのをはっきりと 意識しておられたのです。ベネディ クト十六世が説明しておられます。 「イエスは深い望みをもってこの時 に近づきます。イエスは心のうち で、パンとぶどう酒の形態のもとに ご自身を与える時を待ち望んでおら れました。ある意味でまことのメシ アの祝宴ともいえるこの時を待ち望 んでおられました。そのときイエス は、地上のたまものを造り変え、弟 子たちと一つになります。それは、 弟子たちを造り変え、そこから、世 を変容させるためです。私たちはイ エスの望みのうちに神ご自身の望み を見いだすことができます。神の人 類と被告物に対する愛と期待を見い だすことができます。この愛は一致 の時を待ち望みます。この愛は、 人々をご自身に引き寄せ、そこか ら、造られたものの望みをも満たす ことを望みます。実際、被造物は、

神の子たちの現れるのを待ち望んでいます(ローマ8・19参照)。」[v]

応えてほしいという望みが、イエス・ キリストにおいてどれほど満ち満ち ていたかを考えずにいられるでしょ うか。しかし、主を囲んでいた人た ちは、出来事の超越的な面を気に留 めていなかったのです。それが証拠 に、彼らは、仲間内で誰が一番偉い かを議論しあっていました[vi]。彼 らがイエスのお言葉と振る舞いに心 を深く動かされたことは、聖ヨハネ があの家族の集まりの最後における 主の別れのスピーチを細かく記して いることから明らかですが、目の前 で繰り広げられていることの真の意 味は分かっていなかったのです。そ の使命を理解するのは、聖霊が送ら れた聖霊降臨の日を待たなければな りませんでした。娘たち、息子たち よ、キリストのご受難は私たちに何 を語りますか。どんな信心を込めて

主の十字架を見つめるのでしょうか。

私たち21世紀のキリスト者は、洗礼 において聖霊を受け、2000年の歴史 を持つ信仰と聖体への信心を持って いるのですから、あの初代信者と同 じ状態ではありません。私たちは次 のことを知っています。最後の晩餐 でイエス・キリストは「パンとぶどう 酒の形で、自分を弟子たちに与える ことによって、自分の死と復活を始 めました。イエスは新しいマンナと して、自分のからだと血を与えたの です(ヨハネ6.31-33参照)。古代世 界の人々は、真の意味での人間の糧 一本当に人間を人間たらしめる糧一 は、究極的には『ロゴス』だと考え ました。『ロゴス』とは、永遠の知 恵のことです。この『ロゴス』が今 や愛の形で、本当に私たちの糧とな ります。聖体は私たちをイエスの自 己奉献のわざへと引き寄せます。| [vii]

ですから、聖体に隠れておられる神 に驚嘆し、深く感謝することはたや すいはずです。ところが、多くの場 合そうすることができません。キリ ストの愛に対して、どうして冷淡な のでしょうか。主なる先生の聖心を 焼き尽くす熱愛に対して、どうして 私たちの心は冷えきっているので しょうか。「イエスは私たちに望み を抱いています。私たちを待ち望ん でいます。ところで私たちは、本当 にイエスに望みを抱いているでしょ うか。私たちは心からイエスと出会 いたいと思っているでしょうか。イ エスが近づいてくださり、聖体の中 で私たちにご自身を与えてくださる イエスと一つになることを願ってい るでしょうか。それとも私たちは、 無関心で、上の空で、他のことで頭 を一杯にしてはいないでしょう か。| [viii]

このように、キリストの代理者がカ トリック信者に問いかけておられま す。私たち一人ひとりの個人的で責任ある答が待たれています。私たちの心の奥底でこの答を呼び起こし、惜しみない心でその恩恵を受け取ることができるようにしてくださいると心を込めて聖霊に願いましょう。 イエス・キリストに私たち自身を全まりに献げることを通してそうできます。〈愛には愛で応えるべき〉だからです。

丁度3週間後の4月23日には、聖ホセマリアの初聖体100周年を記念します。このことは、オプス・デイにおけるその子供たちに、より信心を込めてミサ聖祭に与り、また特に深い信心を持って聖体を拝領するように心を動かすものであるはずです。

愛する創立者が、毎日、主をよりよく頂くために勧めた事柄は、数え切れないほどたくさんあります。創立者の傍らで過ごす幸運に恵まれた私たちは、創立者がミサ聖祭をどのよ

うに準備し、どのように奉げ、どのように聖体を拝領し、その後とだらに聖体を打領し、そのままではいたのではない。目前ではないではない。目立てはないのではない。ここではないのではないのではないがあるのではないのではないがあるのではないのではないのではないのではいいといるではない。 がいるではないのいいる交割をいるのではで、簡単に記したいます。

1963年の4月23日には、「私にとって今日は大祝日です。なぜなら、主が私の心においでになることを望まれたからです」[ix]と述べて、キリストの愛を感謝するパドレを助けるよう私たちに頼みました。20世紀初頭、子どもたちがたやすく聖なる食卓に近づけるように必要最低限の条件を考慮した初聖体に関する新たな規定を発布された聖ピオ十世に感謝していたのです[x]。いつも、十歳の

時初めて主を拝領したことを思い起こしていました。「あの当時、ピオ十世のご意向にも関わらず、あのこれを受けるのはまれるではなっていました。今では、ピオーを受けるのではなっています。スペートではなってが一般になってが一般でです。」「xi」を教えてくれたのです。」「xi」

聖体におけるイエスとのあの最初の出会いは、その人生を決定的に方向付けました。毎年、この大好きな日のため時間をかけて準備し、様々な機会に感謝に溢れてこの日を思い起こし、これほど親しく被造物に近づかれる神に驚嘆しておられました。

ところで、長い間、主のご好意を繰り返し考察し、ますます濃やかに感謝を表明されるようになったのは当然ですが、それは年齢を経てからだけのことではありません。ごく幼い

頃から始めた考察であることを思いないであることを思います。にないまであるを得いました。「分をですったででは、これででは、これにはいいっとの情でです。これです。これにもいるです。これにもいるです。これにもいるです。これにもいるです。これにもいるです。これにもいるです。これにもいるです。」[xii]

全ての父親母親が子供たちに示し得る愛よりも大き愛のみが、一人の互のもまりない。 するもますの最終的な一つの表語の形では私たちについてもいる。 したの最終的なっていたの時のでは私たちにない。 では私たちにない。 ではない。 ではない。 ではない。 ではない。 ではありません。 ではない。 ではありません。 ではありません。 ではありません。 ではありません。 ではありません。 主が私たちを立ち上がらせて高め、神のものにしてくださるのです。イエス・キリストは、私たちには不可とを実現してくださいます。のまり、私たちの生活、私たちの行動、私たちの犠牲を超自然のものです。こうは神化された存在になります。他の理由など必要ありません。これをが私の生きる理由なのです。」
[xiii]

くださるのです。「ですから、恩恵を保ち、神を心から愛している人は、聖体拝領の準備ができていないとは言えません。世の中で働き、平和と善の戦いを繰り広げることで、素晴らしい準備をしているのです。」[xv]

今年の初めに、そう望むのであれ ば、創立者が繰り返しておられた射 祷を唱えたらどうかと提案しまし た。それは、福音書にある使徒聖マ タイの言葉で、創立者がミサ聖祭 中、心の中で繰り返していた Dominus meus et Deus meus! [xvi] 私の主、私の神よ、という射祷で す。秘跡の形で現存されるイエス・キ リストに対するこの素晴らしい信仰 の行為に、私たちは驚嘆し、聖体拝 領の準備に最善を尽くすよう促され ます。主を心から愛し、信心を深 め、祭壇上に、また聖櫃に現存され る主と付き合わなければなりませ ん。主を愛していない人のためにも

主を愛し、主に逆らう人のために償 いを奉げるべきです。「主は、毎朝 聖体を拝領する時に、次のように繰 り返すことを必要としておられま す。『主よ、御身であられることを 信じます。秘跡の形で現存される御 身を信じます。御身を礼拝し、御身 を愛します』。そして、聖体訪問の 時に、改めて繰り返しなさい。『主 よ、御身が現存されていることを信 じます。御身を礼拝し、御身を愛し ます』。これが主を愛することで す。こうして日ごとに主への愛が深 まっていきます。

それから、一日中、聖櫃から私たち を見守っておられるイエス・キリスト のことを考え、主への愛のために、 色々なことを最後まできちんと果た もようにすることで主を愛し続っ です。聖体のイエスを心からで し、多くの人が主を愛するようにいに を配りなさい。このような心遣いに 満ちているときだけ、他の人々に教 えることがでます。あなた方が実行し、あなた方が身につけていること、あなた方自身のあり方を、与えるのですから。」[xvii]

また、この日は、創立者が、1902年、生後数ヶ月で堅信の秘跡を受けた記念日でもあります。当時、ス計でといるでは、司教が小教区をまだ受けるの形では、子供たちと、まだ受けるといるに大人に、よるいよくありました。このでは、後年もいたのとなるとはずのというです。

あらゆる社会層の人たちとのある集いで、聖ホセマリアは聖体拝領で受けるキリストと恩恵の状態にある人のうちに現存する聖霊との違いについての質問を受けました。それをしっかりと身につけている人の素早

さで次のように答えました。「聖体について考えるなら、その違いがなら、(…) 聖体にに分かるでしょう。(…) 聖体にのために人となられたちのために人とが、御中性ともが、御中性ともでもでいるでいます。と、私たちの本性により直ちによると、私たちの形態が失われまけると、私たちの時間から、秘跡におけるの現存はなくなります。

けれども神は、私たちが大罪を犯さない限り、私たちのうちに留まられます。恩恵を通して聖霊は私たちの心にお住まいになります。それゆえ、三位のペルソナである唯一の神だけが存在するのですから、三位一体の神がお住まいになるわけです。一位のペルソナが働かれるところには、至聖三位一体の唯一の神がおいでになるのです。| [xviii]

娘たち、息子たちよ、一日中、細心の注意を払って、心にお住まいまうにおましまって、おうにもまって、ようにおいます。と愛を持ったないと愛母にお願るとがで私たちの心に来てくださっないと形で、翌日の聖体拝領をすることが容易になるはずであることが容易になるはずでも、

教皇様のための祈りを忘れないようにしましょう。特に19日の教皇選出7周年の記念日と、16日の85歳の誕生日には、熱心な祈りを奉げ、創立者が教会の典礼集から採られたプレチェスの祈りを、信仰を持って唱えましょう。Dóminus conservet eum, et vivíficet eum, et beatum fáciat eum in terra, et non tradat eum in ánimam inimicorum eius. [xix] 主が彼を守り、力づけ、この地上において幸せにし、彼の敵である人々に彼

を渡さないようにしてくださいます ように。

また、私も皆さんの祈りを頼りにしています。特に属人区長に選出され任命された記念日の20日には、心のこもった祈りをお願いします。こうして私たちは、天国から皆を祝福しておられる聖ホセマリアの心と意に一致して、consummati in unum[xx]完全な一致を保つことができるでしょう。また、復活の主日の協に予定しているカメルーンへの旅行のためにも祈って下さい。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2012年4月1日

[i] 聖ホセマリア、『知識の香』97。

[ii] 同上96。

[iii] 同上76。

[iv] ルカ22,15.

[v] ベネディクト十六世、2011年4月 21日、主の晩餐のミサでの説教。

[vi] ルカ 22,24参照。

[vii] ベネディクト十六世、2005年12 月25日、回勅『神は愛』13。

[viii] ベネディクト十六世、2011年4 月21日、主の晩餐のミサの説教。

[ix] 聖ホセマリア、1963年4月23日 家族の集いのメモ

[x] 聖ピオ十世、1910年8月8日秘跡 聖省令『クワム・シングラーリ』規 定1参照。

[xi] 聖ホセマリア、1966年、家族の 集いのメモ。 [xii] 聖ホセマリア、1960年4月14 日、家族の集いのメモ。

[xiii] 同上。

[xiv] マタイ9,12参照。

[xv] 聖ホセマリア、1964年5月28日、説教のメモ。

[xvi] ヨハネ20,28.

[xvii] 聖ホセマリア、1970年4月4日、家族の集いのメモ。

[xviii] 聖ホセマリア、1972年4月13日、家族の集いのメモ。

[xix] 詩編41,3参照。

[xx] ヨハネ17,23.

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shu-

ren-qu-chang-noshujian-2012nian-4yue/ (2025/12/16)